

個人を結び、社会参加を導く インターネットの効果に関する検討 —ソーシャルキャピタル論の観点から—

古 谷 嘉一郎

比治山大学 現代文化学部

Study on the effects of the Internet on bonding between people and fostering social participation: the viewpoint of the social capital framework

Kaichiro FURUTANI

Faculty of contemporary culture, Hijiya University

Abstract: This study examines the effects of the Internet on individuals and society from the perspective of “social capital”. In chapter 1, the author reviews arguments of Putnam (2000) and Lin (2001), and points out their problems. Then the author redefines social capital. Next, the author introduces the history and characteristics of the Internet. Finally, he explains the problem examined in this thesis. In chapter 2, the author considered the ways in which face-to-face, mobile phone, and short message service (SMS) communication associate with the satisfaction of relationships between same-sex friends. In chapter 3, the author examined the effect of PC mail use and SMS use on two kinds of network (strong-tie and weak-tie) and on adaptation (self-esteem and self-efficacy). In chapter 4, he author examined how seeking crime information through the WWW affected the maintenance of the public space in one's own region. In chapter 5, based on the results of chapter 2-4, the author discussed the individual consequences and social consequences of mail use and information seeking behavior on the WWW. And future studies were proposed.

ソーシャルキャピタル論の基本的な命題は、社会的なつながりによって、我々の生活がいかによりよいものになり、生産的になるかというものである。しかし、ソーシャルキャピタルの捉え方は、この領域の主要な2人の研究者であるPutnamとLinとで大きく異なる。Putnamはソーシャルキャピタルを「社会組織の特徴」として捉え、Linはソーシャルキャピタルを「ネットワークの内部に埋め込まれた資源」と捉えた。また、ソーシャルキャピタルの要素の捉え方も両者で異なる。Putnamは、ソーシャルキャピタルにネットワーク、信頼、互酬性という3つの要素を想定したのに対し、Linはネットワークのみに着目した。そして、ソーシャルキャピタルがもたらす帰結についても両者の間に違いが認められた。Putnamは社会的帰結に着目したのに対し、Linは個人的帰結に着目した。本論文では、彼らの観点を統合し、ソーシャルキャピタル概念を再定義する。そして、近年普及が著しいインターネット利用が導く個人的、社会的帰結をソーシャルキャピタル論の枠組みから解明する。

本論文におけるソーシャルキャピタルは、「個人、社会にポジティブ、ないしはネガティブな帰結を

もたらす人と人とのつながりに埋め込まれた資源」と定義される。その理由は、以下の3点である。第1に、Putnam、Lin双方のソーシャルキャピタルの定義が「人と人とのつながり」の中に存在するという基本的な考え方を共有しているからである。第2に、ソーシャルキャピタルの帰結として社会、個人のどちらかにのみ焦点を当て研究を進めることは、この概念の持つ広範な問題領域での有益性を損なうことになりかねないからである。最後に、ソーシャルキャピタルは、ポジティブ、ネガティブの両者の帰結をもたらすことがわかっているからである。

なお、本定義における資源としては、社会的ネットワークに関する先行研究で扱われてきたものと同様のものを想定している。たとえば、情緒的な安らぎ、情報や物のやり取り、地域活動への参加などである (e. g., Lin, 2001; 内閣府国民生活局, 2003)。ネットワークに埋め込まれたこれら諸資源が利用されることを通して、個人と社会にいかなる帰結をもたらされるのかを検討することが本論文の目的である。

ところで、Putnam (2000) はソーシャルキャピタルについて、結合型、橋渡し型の2つの下位類型を提案している。また、Lin (2001) も、Putnamと類似した類型として、結合の強いネットワークと開放的なネットワークの2つの下位類型を提案している。そこで、本論文においても、これらの2類型に対応した定義を行う。結合型ソーシャルキャピタルの構造は、同質的で親密性の高いメンバーのつながり (例 強い紐帯、地域内のネットワーク) によって特徴づけられることが指摘されている。一方で、橋渡し型ソーシャルキャピタルの構造は、多様で開放的な、親密性の比較的低いメンバーのつながり (例 弱い紐帯、地域間のネットワーク) という特徴を持つことが指摘されている。

これら2種のソーシャルキャピタルには短所と長所が存在する。たとえば、結合型ソーシャルキャピタルのみが豊かな地域に住んでいる場合、その地域の人々は他地域の異質な他者との連携を阻む可能性がある。その一方で、橋渡し型ソーシャルキャピタルのみが豊かな地域に住んでいる場合、

その地域の人々は等質な関係内での他者との豊かな交流に資源を割くことが困難になるといったものである。このような2種類のソーシャルキャピタルの背反性を克服する手段として、本論文ではインターネット利用に着目する。

これまで、インターネットの利用がソーシャルキャピタルに対して与える効果についての議論は未整備である (e. g., Kraut et al, 1998; MacKenna & Bargh, 1998)。このことについて、宮田 (2005) は、インターネットをメールでやりとりすることを目的として用いるのか、情報を集めるために用いるのかなどの利用内容を整理することによって、議論を整備できると主張している。

そこで、本論文では、インターネット利用を1対1のコミュニケーションである電子メール利用、1対多数、多数対多数のコミュニケーションであるオンラインコミュニティ参加 (例 電子掲示板)、WWWでの情報収集の3種の形態に分類した。そして、一連の先行研究からインターネットがソーシャルキャピタルに与える効果を以下のように予測した。

1. PC、携帯メール利用は結合型ソーシャルキャピタルの維持に有効である、PCメール利用は橋渡し型ソーシャルキャピタルの維持に有効である、携帯メール利用は橋渡し型ソーシャルキャピタルの減少をもたらす可能性がある。

2. 電子掲示板などのオンラインコミュニティへの参加は橋渡し型ソーシャルキャピタルの形成、結合型ソーシャルキャピタルの強化に有効である。

3. Yahoo! などを用いたWWWでの情報収集は、橋渡し型ソーシャルキャピタルの代替機能を持つ。本論文では、2については先行研究により知見が蓄積されていることから検討せず、1と3の予測を検討した。

第1章 問題の所在

本章では、PutnamとLinのソーシャルキャピタル論に関するレビューを通して、彼らの議論に関する問題点を指摘し、彼らの議論を統合したソーシャルキャピタルの定義を行った。次に、インターネット利用に関する歴史的経緯とその特徴の紹

介を行った。そして、これまで、インターネットのソーシャルキャピタルに対する効果についての議論が未整備であることを指摘し、この理由として、インターネットの利用内容に着目していなかったことを述べた。そして、インターネット利用内容を分類し、それらの利用内容別にインターネットがわれわれに与える効果を論じた。最後に、本論文で検討するインターネットの利用内容を論じた。

第2章 携帯メール利用が結合型ソーシャルキャピタルの維持に与える効果

対面、携帯電話、携帯メールを用いたコミュニケーションが、同性の友人関係間の関係満足度とどのように関連するかを検討した。具体的には、3（メディア：対面、携帯電話、携帯メール）×3（内容：課題的、情緒的、コンサマトリ的）の9種類のコミュニケーションと関係満足度との関連について、メディアと内容の適合性の観点から検討した。

分析の結果、身近にいて毎日でも対面することが可能な友人関係（近距離友人関係）と物理的に離れていてめったに対面することができない友人関係（遠距離友人関係）では、関係満足度と関連するコミュニケーションが異なることが分かった。近距離友人関係では、対面の全て内容のコミュニケーションと携帯メールの課題的、情緒的コミュニケーションが関係満足度とポジティブに関連していた。さらに、階層的重回帰分析の結果から、対面のコンサマトリ的コミュニケーションが最も関係満足度に関連していた。一方で、遠距離友人関係については、携帯メールの情緒的、コンサマトリ的コミュニケーションが関係満足度にポジティブな関連を示した。加えて、階層的重回帰分析の結果から、携帯メールのコンサマトリ的コミュニケーションが最も関係満足度に関連していた。

これらの結果は、近距離友人関係では、携帯メールは関係維持を補助する効果をもち、遠距離友人関係では、携帯メールが主たる関係維持効果を示すものであった。

第3章 PCメール利用、携帯メール利用が結合型ソーシャルキャピタル、橋渡し型ソーシャルキャピタルならびに個人適応に及ぼす効果

PCメールの利用と携帯メールの利用がネットワークサイズ、ならびに適応に及ぼす影響を検証した。その結果、携帯メールの利用は強い紐帯サイズに正の影響を、弱い紐帯サイズに負の影響を与えることが明らかになった。また、PCメールの利用は弱い紐帯サイズに正の影響をもたらしていた。さらに、強い紐帯サイズ、弱い紐帯サイズは自尊心、自己効力感に対して正の影響をもたらしていた。

これらの結果から、携帯メールは強い紐帯サイズの維持をもたらし、自尊心、自己効力感を高めることが明らかになった。携帯メールの利用は弱い紐帯サイズの減少をもたらし、自尊心、自己効力感を低めるネガティブな効果が示された。その一方で、PCメールの利用は弱い紐帯サイズの維持をもたらし、自尊心、自己効力感を高めることで、携帯メールのネガティブな効果を補う可能性が示唆された。

第4章 WWWを利用した犯罪情報収集活動が治安維持活動ならびに犯罪抑制に及ぼす効果

WWWを用いた犯罪情報収集活動が、地域内における治安維持活動に与える影響を検討した。その結果、WWW利用は治安維持活動に対して正の影響をもたらすことが明らかになった。さらに、自治会などの地域内での活動に代表される地域内のネットワークの活発性の程度、ならびにボランティア活動に代表される地域間のネットワークの活発性の程度の地域のソーシャルキャピタルを考慮した検討を行った。その結果、WWW利用が地域内における治安維持活動に対する影響は、地域内、地域間のネットワークの活発性の程度が両方とも高い地域、もしくは両方とも低い地域でのみ、正の影響をもたらすことが明らかになった。

第5章 総括と今後の課題

2章から4章における一連の検討結果に基づき、インターネット利用、特に電子メール利用と情報収集に焦点を当てて、これらをもたらす個人的帰結ならびに社会的帰結の過程について総括した。

そして、従来の研究に対する貢献、そして本論文で示された知見の応用可能性、技術発達による新たなインターネット利用がソーシャルキャピタルに与える効果についての更なる展望、インターネット利用のよりよい効果を得るための今後の方策、今後の課題について考察がなされた。

引用文献

Kraut, R. E., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukhopadhyay, T., & Scherlies, W. (1998). Internet Paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 9, 1017-1032.

Lin, N. (2001). *Social capital: A theory of Social structure and Action*. New York : Cambridge University Press.

McKenna, K. Y. A., & Bargh, J. (1998). Coming out in the age of the internet: "Demarginalization" through virtual group participation. *Journal of Personality and*

Social Psychology, 75, 681-694.

宮田加久子 (2005). インターネットの社会心理学 風間書房.

内閣府国民生活局 (2003). ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動との好循環を求めて 国立印刷局.

Putnam, R. D. (2000). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon and Schuster.